

部活や研究に情熱を注ぎ、有意義な学生生活を送っている様子を取材しました。

常三島キャンパス

学生団体「わかもの」とで 能登半島地震の復興を支援

生物資源産業学部 生物資源産業学科 4年

高田 太陽 (ただだたいよう)



能登地震学生団体
「わかもの」の活動の詳細は
noteをご覧ください。

今年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」。最大震度7を観測し、甚大な被害を及ぼしたこの地震の直後、学生ボランティア団体「わかもの」の立ち上げに参加。現地の企業やNPO、地域団体と連携し、被災地支援に動き出した高田さんは早い段階で被災地に入り、各所からの支援を受けつつ、ボランティア活動を行いました。初めは40人程度でしたがSNSを通じて全国から学生が集まり、LINE登録者は1000人、現地でボランティアに参加した人数は約150人となりました。

「なぜボランティアをしようと思ったのか、

よく理由を訊かれるのですが、正義感や課題意識があったわけではなく、「思わず体が動いた」感じです。教養教育院 北岡先生のアントレプレナー教育やi.school(*)に参加していたことも影響したかもしれません。

この体験から「行動することの大切さと、それには多大な責任が伴う」ということを感じたそうです。「今後については明確には決めていませんが、何かに対して責任を持ってチャレンジし続けたい」と話しました。

(*) 徳島大学 i.school・・・
日本や世界を変えるイノベーションを実現する人材を
「徳島」で育成する取組

蔵本キャンパス

「あせち連」の連長を体験し 成長を実感

薬学部 薬学科 3年

古賀 翼 (こがつばさ)



古賀さん(写真中央)。徳島市の阿波おどりは毎年8月11日～15日に開催されていて、「あせち連」は今年、12日と15日の2日間参加し、大いに盛り上がったそうです。ちなみに「あせち連」はもともと薬学サッカー部を中心に発足したため、連長は代々サッカー部から選出されているそうです。

新型コロナウイルスの影響や天候不良により、中止や期間短縮が続いていた徳島市の阿波おどり。今年は南海トラフ地震臨時情報の「巨大地震注意」が発表される中での開催でしたが、「事故や怪我もなく、無事に終えてホッとしている」と話す「あせち連」の連長 古賀さん。「あせち連」は薬学部の阿波おどり連で、今年はOB、OGも含め約70人が参加。かつてない大人数のとりまとめにかなり苦労したと振り返ります。「昨年の阿波おどりを

経験しているのが僕しかないこともあり、必然的に連長を任されたのですが、法被の発注やスポンサーとの交渉、事務連絡など初めてのことも多く、大変でした。もともと内気なタイプですが、連長を経験したことで社会的になり、コミュカも上がったように思います。踊りの上手下手に関わらず、薬学部一丸となって阿波おどりを盛り上げるのが「あせち連」の魅力。「毎年4月、5月頃に募集を開始するので、薬学部の皆さんはぜひ参加してみてください」。